

学級場面における小中学生の基本的心理欲求と学級風土との関連

Relationship between Basic Psychological Needs of Elementary and Junior High School Students and Classroom Climate in Classroom Situations.

吉 崎 聡 子*

Satoko YOSHIZAKI*

概 要

本研究は、児童生徒が最も日常的に属する集団である学級および学級で行われる学級活動を対象とし、どのような学級風土が基本的心理欲求の充足に関連するのか検討することを目的とした。検討にあたってはConnell & Wellborn（1991）による、基本的心理欲求の充足に関わる、文脈と個人と行為と結果についてのシンプルモデルの一部を学級という「集団」と個人の関係にあてはめ、文脈として存在する学級「集団」のどのような機能が、「個人」の3つの基本的心理欲求を充足するように働くのか検討した。重回帰分析の結果より、ポジティブな学級風土が個人の基本的心理欲求充足に概ね良い影響を与えることが示唆された。一方学級内の不和のようなネガティブな学級風土は個人の基本的心理欲求充足を阻害する要因となる可能性も示された。

キーワード：基本的心理欲求充足、学級風土、自己決定理論

1 問題と目的

日本の初等中等教育における「特別活動」は、海外からも高く評価されている教科外活動の1つである（中教審特別活動WG, 2016）。対外的にも評価の高い「特別活動」は、各教科で学んだことを汎用的な能力に高める役割を担い、教科と特別活動は往還的な関係にある。この特別活動の中心的な活動は学級活動であろう。学級活動は学習指導要領により、小学校・中学校ともに年間35時間の実施が定められている（ただし、小学1年生は年間34時間）。特別活動における学級活動は集団活動が基本である。平成29年度改定以前の学習指導要領では、特別活動は「望ましい集団活動を通して」なされるものと記載されていたが、平成29年学習指導要領では「望ましい集団活動」の文言は表記されなかった。これは「望ましい集団」が不要になったわけではなく、これまでの表記では「望ましい集団」の形成こそが特別活動の目的と捉えられ、教師の期待する児童像からはみ出しを許容しない、過度の同調圧力につながりかねないという配慮によるもの

であった（文部科学省, 2018）。「望ましい集団」で行うことが前提であるが、現在は子ども達一人一人という「個」への配慮を併存させる必要があると言えよう。

題目に特別活動を含む論文を対象に内容分析を行った石田（2017）は、特別活動を対象とする研究では集団形成や集団の有り様についての研究が多く見られていることを指摘しており、特別活動は実践と研究の両面で「望ましい集団の形成」に関心が偏っていたと言えるだろう。加えて石田（2017）の内容分析では、集団を形成する「個人」に注目したとみられる研究については報告されなかった。しかしながら平成29年学習指導要領において、特別活動では、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」という3つの視点が提示されたが、その中でも「人間関係形成」は個人と個人のつながりから人間関係が形成されるものであることから、集団と同程度に個人も注目されてしかるべきではないだろうか。吉崎・平岡（2018a, 2018b）は小学生と中学生を対象として、特別活動と学級活動参加意欲や学級風土の関連を検討した。その結果、児童生

*弘前大学教育学部

Faculty of Education, Hirosaki University

徒「個人」を分析対象とした場合は、特別活動について良い印象を抱いているほど積極的に学級活動に参加し、所属学級に満足している傾向が見られた。しかし、「学級」を分析対象とした場合には、このような傾向はあまり見られなかった。このように、それぞれの児童生徒にとって特別活動は学級への適応感を高める効果があるが、学級という個人の集合体で検討した場合、特別活動の学級適応への効果が認められず、従って「集団」にのみ注目した場合、特別活動の実施による効果が見えづらくなる可能性がある。よってこれからの特別活動はより「個人」と「集団」の双方向への配慮が必要であり、「個人」と「集団」の両面についての研究が必要であると考え。

本研究は、小中学校の特別活動について、自己決定理論における基本的心理欲求充足に関する理論に基づき、「個人」と「集団」の相互作用の検討を目的とする。日米の教育現場について研究を行っているルイス (2013) は、日本の特別活動は子どもの自主性や帰属感、達成感をよく育てており、また Deci & Ryan (2003) が提唱する、人間の3つの基本的心理欲求 (自律性・コンピテンス・関係性) を学校が満たすことができるならば、学校と子どもたちの間に絆が作られ、子どもたちが学校の価値を受け入れられるようになる」と述べる。この Deci & Ryan (2003) が提唱する、人間の3つの基本的心理欲求とは、自己決定理論 (Deci & Ryan, 1985, 2003) において人間が普遍的に持つとされた欲求である。3つの基本的心理欲求が充足されると動機づけの自律性 (自己決定性) や精神的健康 (well-being) が促進されるとしている。Deci & Ryan (2003) の自己決定理論は、学習や健康、スポーツなど多くの分野において、3つの基本的心理欲求充足が直接的に、または間接的に精神的健康 (well-being) に正の影響を及ぼすことが検証されている (Sheldon & Niemiec, 2006)。また学校適応感に対しては、間接的に影響することが Connell & Wellborn (1991) によって示された。さらに吉崎 (2014) は、学校適応感を精神的健康 (well-being) の一部とみなし、基本的心理欲求の充足が学校適応感に直接的に影響を及ぼすことも確認した。また西村・櫻井 (2015) は3つの基本的心理欲求の充足と学校場面における様々な活動との関連を検討した。西村・櫻井 (2015) は様々な活動としてスクール・モラルを挙げ、友人関係、学業活動、教師との関係、クラスとの関係、進路活動の5つの活動領域が基本的心理欲求の充足に関連するのかを検討した。その結果、自律性と関係性が

友人関係と、有能感は学業活動と強い関連を持つことが明らかとなった。

では学級という「集団」は、これまでどのように検討されてきただろうか。学級の様相を把握する方法には、楠見 (1986) の学級成員の相互選択関係を用いるソシオメトリックテストや、三隅・吉崎・篠原 (1977) の教師のリーダーシップ型による分類という構成員単位で学級事象を分解するマイクロな手法 (伊藤・松井, 2001) があった。このマイクロな手法に対して根本 (1983) や伊藤・松井 (2001) は学級を個人のようにとらえ、その学級の持つ雰囲気や個性といった多面的な学級という場全体を記述するマクロな手法を採用した。特に伊藤・松井 (2001) は Moos (1976) の提唱する組織風土の3領域 (関係性・個人の発達と目標志向性・組織の維持と変化) に対応する学級風土という概念を採用した。学級風土はこの生徒が認知する学級の特徴から学級の持つ個性を描きだすものと四辻・水野 (2013) は述べる。学級風土は、学級に関する様々な要因との関連が検討されている。例えば、宇田川・下田 (2013) は児童が日々を過ごす学級という場の認知を学級風土質問紙によって評定し、アサーションとの関連を検討した。アサーションと学級風土の各下位尺度間相関から検討した結果、男女とも学級全体の雰囲気がアサーティブな行動形成に関わることが示唆された。

本研究は、スクール・モラルのような学校場面での様々な活動ではなく、児童生徒が最も日常的に属する集団である学級および学級で行われる学級活動を対象とする。対象を学級に限定し、どのような学級風土が基本的心理欲求の充足に関連するのかが検討することを目的とする。検討にあたっては Connell & Wellborn (1991) による、基本的心理欲求の充足に関わる、文脈と個人と行為と結果についてのシンプルモデルの一部を学級という「集団」と個人の関係にあてはめて検討する。文脈として存在する学級「集団」のどのような機能が、「個人」の3つの基本的心理欲求を充足するように働くのかが検討する。

2 方法

(1) 調査時期

2022年4月～5月。

(2) 調査協力者

東北地方国立大学の教育学関連教養科目受講学生67

名（平均年齢18.38歳，SD=1.25）及び東北地方国立大学教員養成系学部所属の「特別活動（初等）」受講学生46名（平均年齢20.33歳，SD=.47）。

（3）質問紙の構成

Microsoft Forms を使用し，無記名式質問紙調査を実施した。実施にあたっては，回答内容が成績には影響しないこと，回答は任意であることを伝えた。

調査は回想法を用い，教養科目受講学生には中学生時代，「特別活動（初等）」受講学生には小学校6年生当時を思い出して回答するように教示を与えた。両群とも質問紙の構成は同じである。

1）学級風土尺度

伊藤（2009）の作成した小学生用短縮版学級風土質問紙26項目を使用した。回答は5件法とし，各項目に対して，小学校6年または中学校3年の頃の在籍学級を思いだし評定をするように教師した。質問紙は「学級活動への関与」「学級内の不和」「学級への満足感」「自然な自己開示」「学習への志向性」「規律正しさ」の6因子から構成される。質問項目中「クラス」という文言を「学級」に置き換え使用した。

2）基本的心理欲求充足尺度

Deci & Ryan（2000）の“The Basic Need Satisfaction in Life Scale”の久保他（2003）による翻訳版を元に，西村・櫻井（2015）が作成した尺度である。有能感4項目，関係性4項目，自律性4項目，計12項目からなる。質問項目中「学校」という文言を学級での欲求充足を測定するために，「学級」という語に置き換え4件法にて回答を求めた。

3 結果

（1）学級風土尺度

1）小学校学級風土尺度の因子分析

小学校の学級について回答した46名の回答について因子分析（最尤法，promax 回転）を行い，因子の抽出を試みたが，質問項目数に対して回答者数が少なかったためか，安定した解釈可能な因子を抽出することができなかった。そのため，伊藤（2009）の6因子を適用することとした。各因子の項目と内的整合性を確認するためのCronbachの α 係数は表1に示す。今後の分析では，各因子に該当する項目の素点を項目数で除したものを下位尺度得点として使用する。本研究の下位尺度得点と伊藤（2009）による下位尺度得点を比較すると，多くの下位尺度得点について本研究の値

表1 小学校学級風土因子

学級活動への関与（$\alpha = .789$）
学級活動に多くのエネルギーを注ぐ
学級がうまくいかない時にみんな心配する
誰もが学級全体のことを考えている
先生に言われた以上に作業や活動をする
学級の活動に自分から進んで参加する
学級内の不和（$\alpha = .766$）
全体がいやな雰囲気になることがある
お互いにきらっている人がいる
他と一緒にならないグループがある
学級がバラバラになる雰囲気がある
めめごとが少ない（R）
学校への満足度（$\alpha = .878$）
この学級が気に入っている
学級で顔を会わせるのを楽しみにしている
この学級は，笑いが多い
心から楽しめる
自然な自己開示（$\alpha = .817$）
自分達の気持ちを素直に先生にみせる
個人的な問題を安心して話せる
先生がいても遠慮なく話せる
自分達の気持ちを素直に先生にみせる
学習への志向性（$\alpha = .799$）
その日の勉強や宿題をこなすことを重視する
授業中よく集中している
学級みんなは，よく勉強する
この学級は，勉強熱心だ
規律正しさ（$\alpha = .891$）
そうじ当番をきちんとする人が多い
先生の指示にすばやく従う
この学級は，規則を守る
守るべき規則がはっきりと示されている

の方が大きかった。これは，伊藤（2009）は実際に小学生に対して，現在所属する学級の評定を求めたのに対して，本研究は回想法によって大学生が小学生当時を思い出して評定しているため，小学校当時の記憶が薄れ，より印象的な記憶のみが想起されたために起こった可能性がある。

2）中学校学級風土尺度の因子分析

中学校の学級について回答した67名の回答について因子分析（最尤法，promax 回転）を行った。初期固有値1以上を因子抽出基準とし因子を抽出したが，内

的整合性から削除が望ましいと判断された2項目（自分達の気持ちを気軽に言い合える、他と一緒にならないグループがある）を除き、再度因子分析を行った。結果6因子が抽出された（表2）。F1は学級の満足度に関する項目が多いことから「F1学級満足」と命名

した。F2は指示規則の遵守に関する項目が多いことから「F2規律正しさ」と命名した。F3は学級内の不和に関する4項目からなっているため、「F3学級内不和」と命名した。F4は学級への関心や学級での活動への参加に関する5項目からなるため「F4学級活動

表2 中学校学級風土尺度因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1 学級満足 ($\alpha = .914$)						
この学級が気に入っている	.910	-.007	.111	-.046	.086	-.052
学級で顔を会わせるのを楽しみにしている	.816	-.070	.030	.053	-.024	.030
この学級は、笑いが多い	.752	-.051	.002	.077	.173	.069
心から楽しめる	.665	.094	.175	.086	-.041	-.101
個人的な問題を安心して話せる	.335	.230	.222	.142	.162	-.165
F2 規律正しさ ($\alpha = .834$)						
その日の勉強や宿題をこなすことを重視する	.161	.816	-.267	-.041	-.110	.153
そうじ当番をきちんとする人が多い	-.011	.706	-.002	-.102	.139	-.116
守るべき規則がはっきりと示されている	-.144	.702	-.060	.065	-.209	.010
授業中よく集中している	.109	.611	-.026	-.032	.043	.293
先生の指示にすばやく従う	-.268	.563	.309	.019	.409	-.100
この学級は、規則を守る	.028	.532	.267	-.071	-.057	.121
F3 学級内不和 ($\alpha = .800$)						
全体がいやな雰囲気になることがある	.010	.181	-.947	.066	-.202	-.052
もめごとが少ない (R)	-.212	.062	-.704	.146	.038	-.186
学級がバラバラになる雰囲気がある	-.234	.011	-.693	.103	.102	-.090
お互いにきらっている人がいる	.094	-.218	-.401	-.219	.090	.020
F4 学級活動への関与 ($\alpha = .821$)						
先生に言われた以上に作業や活動をする	.009	-.176	-.063	.764	.115	.148
誰もが学級全体のことを考えている	-.053	-.004	.391	.755	-.227	-.076
学級活動に多くのエネルギーを注ぐ	.125	.102	-.237	.741	.116	-.064
学級の活動に自分から進んで参加する	-.052	-.062	-.214	.685	.249	.238
学級がうまくいかない時にみんな心配する	.239	.111	.011	.510	-.188	-.106
F5 先生への自己開示 ($\alpha = .879$)						
自分達の気持ちを素直に先生にみせる	.156	.022	.014	-.032	.830	.023
先生がいても遠慮なく話せる	.057	-.141	.053	.141	.814	-.046
F6 勉強熱心 ($\alpha = .850$)						
学級のみんなは、よく勉強する	.092	.111	.031	.082	-.021	.938
この学級は、勉強熱心だ	-.234	.027	.364	.076	-.013	.680
因子相関						
因子	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1	1	.381	.403	.460	.470	.041
F2		1	.568	.492	.235	.298
F3			1	.323	.304	.157
F4				1	.270	-.061
F5					1	.145
F6						1
削除	自分たちの気持ちを気軽に言い合える 他と一緒にならないグループがある					

への関与」と命名した。F5は先生との関わり方に関する2項目からなるため「F5先生への自己開示」と命名した。F6は勉強に関する2項目からなるため「F6勉強熱心」と命名した。今後の分析では、各因子に該当する項目の素点を項目数で除したものを下位尺度得点として使用する。

(2) 基本的心理欲求充足尺度

基本的心理欲求充足尺度は、小学校、中学校ともに西村・櫻井(2015)の3因子を適用した。Cronbachの α 係数を算出し泣いていき整合性を確認した。有能感(小 α =.759, 中 α =.788), 関係性(小 α =.717, 中 α =.777), 自律性(小 α =.695, 中 α =.849)であった。それぞれ西村・櫻井(2015)とほぼ同程度の値であり, 内的整合性は確認できた。基本的心理欲求3因子についても, それぞれの項目の得点を合計し, 項目数で割ったものを下位尺度得点とし, 今後の分析では使用する。学級風土下位尺度得点, 基本的心理欲求下位尺度得点の平均値と標準偏差は表3, 表4に示す。

(3) 学級風土と基本的心理欲求の関連

学級風土と基本的心理欲求の関連を検討するために, 小学校, 中学校それぞれについて学級風土下位尺度と基本的心理欲求下位尺度によるピアソンの相関係数を算出した(表3, 表4)。

小学校では, 全ての変数の組み合わせにおいて有意な相関が見られた。なかでも「学級内の不和」と3つの基本的心理欲求の間では負の相関が見られ, 学級内の不和が基本的心理欲求充足を阻害する要因となりうると思われた。

中学校では, 小学校と異なり一部の変数との間に有意な相関が見られなかった。しかしF3学級内不和と3つの基本的心理欲求の間には, 小学校と同じく負の有意な相関が見られた。よって中学校においても, 学級内の不和は3つの基本的心理欲求充足を阻害すると考えられる。

さらに, 小学校, 中学校それぞれについて, 学級風土6因子を独立変数, 3つの基本的心理欲求充足を従属変数とする重回帰分析を行った。結果を表5, 表6

表3 小学校各下位尺度得点平均, SD, 相関係数

	平均	(SD)	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 有能感	2.870	(0.584)	1	.784**	.675**	.618**	-.494**	.607**	.623**	.617**	.610**
2. 関係性	3.076	(0.508)		1	.549**	.510**	-.474**	.533**	.644**	.621**	.607**
3. 自律性	2.967	(0.567)			1	.371*	-.362*	.406**	.454**	.320*	.366**
4. 学級活動への関与	3.509	(0.822)				1	-.388**	.580**	.490**	.472**	.698**
5. 学級内の不和	2.783	(0.863)					1	-.694**	-.553**	-.388**	-.359*
6. 学級への満足感	4.114	(0.752)						1	.631**	.528**	.472**
7. 自然な自己開示	3.641	(0.849)							1	.556**	.423**
8. 学習への志向性	3.495	(0.781)								1	.702**
9. 規律正しさ	4.054	(0.851)									1

** $p < .01$, * $p < .05$

表4 中学校各下位尺度得点平均, SD, 相関係数

	平均	(SD)	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 有能感	2.679	(0.635)	1	.594**	.760**	.575**	.659**	-.484**	.608**	.503**	.036
2. 関係性	3.075	(0.614)		1	.596**	.680**	.623**	-.489**	.482**	.486**	.317**
3. 自律性	2.772	(0.720)			1	.637**	.391**	-.375*	.498**	.586**	-.088
4. 中F1満足	3.740	(1.121)				1	.526**	-.696**	.542**	.577**	.117
5. 中F2規律正しさ	3.607	(0.848)					1	-.374*	.654**	.433**	.538**
6. 中F3学級内不和	2.869	(1.062)						1	-.366*	-.415**	-.260
7. 中F4学級活動への関与	3.299	(0.964)							1	.347**	.106
8. 中F5自己開示	3.806	(1.237)								1	.151
9. 中F6勉強熱心	2.836	(1.046)									1

** $p < .01$, * $p < .05$

に示す。

小学校では、有能感について決定係数 R^2 は有意な値であった ($R^2=.531, p<.001$) が、独立変数には有意な標準回帰係数がみられなかった。関係性では決定係数 R^2 は有意な値であった ($R^2=.504, p<.001$)。6つの独立変数の中で自然な自己開示の標準回帰係数のみ有意な値 ($\beta=.369, p<.05$) が見られた。自律性については、有意な決定係数も標準回帰係数も見られなかった ($R^2=.148, n.s.$)。

中学校では、有能感について決定係数 R^2 は有意な値であり ($R^2=.453, p<.001$)、独立変数の中でF5先生への自己開示の標準回帰係数のみ有意な値 ($\beta=.250, p<.05$) であった。関係性では決定係数 R^2 は有意な値であった ($R^2=.497, p<.001$)。6つの独立変数の中ではF2規律正しさに有意な負の標準回帰係 ($\beta=-.018, p<.001$) が見られた。またF6勉強熱心に正の有意な標準回帰係数が見られた ($\beta=.227, p<.05$)。自律性については、決定係数 R^2 は有意な値であり ($R^2=.512, p<.001$)、F1学級満足 ($\beta=.297, p<.05$)、F5先生への自己開示 ($\beta=.350, p<.01$) には正の有意な標準回帰係数が、F6勉強熱心 ($\beta=-.270, p<.05$) には負の有意な標準回帰係数が見られた。

4 考察

本研究はConnell & Wellborn (1991) による、基本的心理欲求の充足に関わる、文脈と個人と行為と結果についてのシンプルモデルの一部を学級という「集団」と個人の関係にあてはめ、文脈として存在する学級「集団」のどのような機能が、「個人」の3つの基本的心理欲求を充足するように働くのか検討することを目的とした。

調査は大学生に対して、小学校時代または中学校時代を回想して回答してもらい、回想法による質問紙調

査を実施した。学級集団の機能を測定するために、伊藤 (2009) の小学生用短縮版学級風土質問紙を使用した。個人に関する変数としてDeci & Ryan (2003) が提唱する、人間の3つの基本的心理欲求の充足を測定する西村・櫻井 (2015) による尺度を使用した。

(1) 学級風土について

小学校の学級風土をどのように認知していたか検討するため、小学校の学級風土尺度について因子分析を行ったが、質問項目数に対して回答者数が少なかったためか、安定した解釈可能な因子を抽出することができなかった。そのため、伊藤 (2009) の6因子を適用することとした。本研究の下位尺度得点と伊藤 (2009) による下位尺度得点を比較すると、多くの下位尺度得点について本研究の値の方が大きかった。これは伊藤 (2009) では実際に小学生に対して、現在所属する学級の評定を求めたのに対し、本研究は回想法によって大学生が小学生当時の学級を評定しているという違いを反映していると考えられる。

中学校の学級風土の認知については、6因子が抽出された。6因子の多くは伊藤 (2009) の下位因子と近似していたが、先生や勉強についてよりそぎ落とされ単純化された項目が並んだ。この点も、回想法による回答方法が影響しているのではと考える。

(2) 基本的心理欲求充足

基本的心理欲求充足については西村・櫻井 (2015) にならぬ有能感、関係性、自律性の3因子を適用した。中学生を対象に研究している西村・櫻井 (2015) による3因子の下位尺度得点と本研究を比較し、平均得点、SDに大きな差はなく、いずれかが大きく落ち込んでいるという様な傾向は見られなかった。

(3) 学級風土と基本的心理欲求の関連

学級風土と基本的心理欲求の関連を検討するため

表5 小学校を対象とした重回帰分析結果

	有能感	関係性	自律性
	β		
小学級活動への関与	.220	.006	.044
小学級内の不和	-.078	-.094	-.083
小学級への満足感	.106	.005	.089
小自然な自己開示	.237	.369*	.293
小学習への志向性	.197	.169	-.082
小規律正しさ	.139	.292	.198
adj R^2	.531***	.504***	.148

*** $p < .001$. * $p < .05$

表6 中学校を対象とした重回帰分析結果

	有能感	関係性	自律性
	β		
中 F1学級満足	.218	.511	.297*
中 F2規律正しさ	.100	-.018***	.128
中 F3学級内不和	.055	-.022	-.024
中 F4学級活動への関与	.390	.146	.188
中 F5先生への自己開示	.250*	.103	.350**
中 F6勉強熱心	-.096	.227*	-.270*
adj R^2	.453***	.497***	.512***

*** $p < .001$. ** $p < .01$. * $p < .05$

に、小学校、中学校それぞれについて学級風土下位尺度と基本的心理欲求下位尺度について相関係数を算出した。小学校、中学校ともに、学級風土の中でも「学級内の不和」に関する下位尺度と3つの基本的心理欲求の間に負の相関が見られた。基本的心理欲求のうち、関係性は他者との安心できる関係の構築によって充足される欲求であるため、学級風土「学級内の不和」との間に負の相関が見られることは妥当であろう。加えて有能感、自律性との間に負の相関が見られたことから、自身が学級の中で力を発揮することができ、自らの意思が尊重されている感覚は、学級内の不和によって阻害されてしまう可能性が示された。さらに学級風土下位尺度同士の相関では、小学校・中学校ともに「学級内の不和」はその他の学級風土下位尺度との間に有意な負の相関が見られた。相関分析であるため、学級内の不和と基本的欲求充足の阻害の因果を定めることはできないが、学級内の不和が学級集団だけではなく、学級の構成員個人にも望ましくない影響を及ぼすと考えられる。

他に、中学校では、学級風土 F6 勉強熱心との組み合わせによる相関係数が、他の組み合わせと異なった。勉強熱心と有意な正の相関が見られたのは、基本的心理欲求の関係性、学級風土 F2 規律正しさの2変数であった。このことから中学生にとっては、学級内の勉強熱心さは学級内の良好な人間関係と、規律正しく安心して勉強できる学級環境に支えられていると推測された。

さらに、小学校、中学校それぞれについて、学級の機能が基本的欲求充足に及ぼす影響を検討するため、学級風土6因子を独立変数、3つの基本的心理欲求充足を従属変数とする重回帰分析を行った。

小学校では、有能感欲求の充足について、学級風土6因子によって約53%が説明できる結果となったが、学級風土6因子のいずれかが突出して影響を与えているわけではなく、学級風土6因子全てが関連しあって、有能感に影響を及ぼしていると考えられた。関係性欲求の充足については、学級風土6因子により約50%が説明できるといえ、その中でも自然な自己開示の影響が大きいことが確認できた。学級内で他者との良好な関係を作り保つためには、自己開示が重要であることを示しているだろう。最後に自律性については、重回帰分析の結果より学級風土6因子では説明できないと言えた。

中学校では、有能感欲求の充足について、学級風土6因子によって約45%が説明できるという結果となっ

た。なかでも先生への自己開示の影響が他と比べて有意に大きいと言え、中学生が学級内で有能感を持つためには、先生との間に良好な関係を持つことが求められると考えられた。

関係性欲求の充足については学級風土6因子により約50%が説明できると言えた。特にF2規律正しさが負の影響を、またF6勉強熱心が正の影響を与える可能性がある。しかしこの重回帰分析の結果は相関分析の結果と異なる。一つの可能性として、関係性欲求の充足度合いが低い時期には、規律正しさは関係性欲求の充足を阻害するが、関係性欲求の充足度合いが高い場合には、規律正しい学級環境に安心できるのではないか。この点については、更なる検討が求められよう。自律性欲求充足については、学級風土6因子によって、約51%を説明することができ、特に学級への満足さと先生に対する自己開示が、自律性欲求の充足に大きな影響を及ぼすことが示された。また学級が勉強に熱心であることは、同調圧力を生じさせ勉強に対する自己決定性を阻害する可能性があると考えられた。

本研究では、学級風土が学級成員である個人の基本的心理欲求充足にどのような影響を及ぼすのか検討した。結果として学級風土が個人の基本的心理欲求充足に概ね良い影響を与えることが示唆された。Connell & Wellborn (1991) による、基本的心理欲求の充足に関わる、文脈と個人と行為と結果についてのシンプルモデルにあてはめた場合、文脈と個人の関連について検討したにすぎない。今後、文脈と個人の関連から、学級活動という行為とその結果までを含めた検討を行う必要があると言えよう。

5 文献

- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会特別活動ワーキンググループ (2016) 特別活動ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて (報告)
- Connell, J. P., & Wellborn, J. G. (1991) Competence, autonomy, and relatedness: A motivational analysis of self-system processes. In M. R. Gunnar, & L. A. Sroufe (Eds.), *Minnesota symposia on child psychology* : vol. 23. Self processes and development. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp43-77.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2003) *Handbook of self-determination research*. The University of Rochester Press.
- 伊藤垂矢子 (2009) 小学生用短縮版学級風土質問紙の作成と活用, コミュニティ心理学研究, 12, pp155-169.
- 石田美清 (2017) 特別活動の理論と実践の研究動向—日本特別活動学会紀要論文の内容分析—日本特別活動学会

- 紀要, 25, pp3-8.
- キャサリン・ルイス・杉田 洋 (2013) 初等教育資料, 898, 54-59.
- 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成29年公示) 解説 特別活動編
- 西村多久磨・櫻井茂男 (2015) 中学生における基本的心理欲求とスクール・モラルとの関連—学校場面における基本的心理欲求充足尺度の作成, パーソナリティ研究, 24, pp124-136.
- 大久保智生, 長沼君主, 青柳肇 (2003) 学校環境における心理的欲求の充足と適応感との関連, ヒューマンサイエンスリサーチ (早稲田大学大学院人間科学研究科), 12, pp21-28.
- Sheldon, K. M., & Niemiec, C. P. (2006) . It's not just the amount that counts: Balanced need satisfaction also affects well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91 (2), pp331-341. doi:10.1037/0022-3514.91.2.331
- 杉田 洋 (2017) 平成29年版小学校新学習指導要領の展開 特別活動編, 明治図書出版, pp10-25.
- 宇田川翔太・下田芳幸 (2013) 小学生における学級風土認知とアサーションとの関連, 教育実践研究: 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 7, pp15-20.
- 四辻伸吾・水野治久 (2013) 児童の理想的学級像認知とスクール・モラルの関連, 大阪教育大学紀要 第IV部門, 61, pp235-247.
- 吉崎聡子 (2014) 学校適応感と心理的欲求充足の関連について—鱈ヶ沢町の小学校を対象として—, 地域社会研究, 7, pp118-122.
- 吉崎聡子・平岡恭一 (2018a) 中学校における学級活動の雰囲気と学級風土の関連について, 弘前大学教育学部紀要, 119, pp.137-147.
- 吉崎聡子・平岡恭一 (2018b) 小学校における学級活動の雰囲気と学級風土の関連について, 弘前大学教育学部研究紀要クロスロード, 22, pp183-193.

謝辞

本研究は JSPS 科研費19K14227の助成を受けたものである。

(2023. 1. 13 受理)